農村集落の民俗空間構成に関する研究

笹 谷 康 之*
中 村 良 夫**

A Study on Spatial Cognition of a Settlement by Means of Folk-Taxonomy

Yasuyuki SASATANI
Yoshio NAKAMURA

摘要：伝統的な農村集落とは村人にとって一つの小宇宙を構成しており、そこには濃密な意味が込められた象徴的な場所・領域・方向が存在し、土地にまつわる肌理細かい空間認識の体系が認められる。そこで本論では、多摩丘陵の一角にある川崎市久末集落を事例に、地名、地物の空間的認識、集落内集団の呼称、土地にまつわる伝承、古老の体験などから、村人の民俗分類に立脚した集落の空間構成について報告するものである。

1. はじめに

伝統社会は、土地にまつわる豊かな民俗分類の知識体系を育んできた。これらの知識は、生活様式の近代化のなかで現在急速に忘れ去られつつあるが、肌理細かい生活環境整備を行っていくために再認識・再構成される必要がある。人々によって伝承されてきた地名は、このような土地にまつわる知識のキーワードである。柳田¹⁾は、「地名はわれわれの生活上の必要にもとづいてできたものであるからには、必ず一つの意味をもち、それらがまた当該土地の事情・性質を、少くともできた当座には言いあらわしていただろう」と論じている。（とりわけ微細な通称地名は、土地の性質を深く端的に表している例が多い。この微細地名を伝承してきた集団は、農村においてはいわゆるムラ（村落共同体、多くは大字の領域をもつ）であった。ムラとは、一般に近世の藩制村に基盤をもつ共同体的性格の強い社会集団とされている。本研究では、ムラの領域、つまり村人によって認識される空間・地物の総体を集落と定義した。村人にとって一つの小宇宙を構成している集落は、環境を読みとり、土地にまつわる有意な認識体系を築く場であった。

このような住民の内面的価値観を通じて環境認識を明らかにしようとするのが、近年脚光を浴びている認識人類学・民族地理学の潮流である。動植物の民俗分類の研究が多いが、地形・方位等の方名²⁾、地名などから空間構成について論及している論文も少なからず存在する。日本での事例としては、浅野³⁾が三宅島の3集落について地

形方名・地名を分析し、地形に関する民俗分類を検出し、そこでの環境観を論じた。この研究は、日本における地形の民俗分類としてはきわめて精緻であるが、集落の空間構成にまでは言及していない。

一方、民俗学では、分類項目を網羅する調査方法に対する反省から、空間論的に民俗事象の全体像を再構成する方法が試みられている。松崎⁴⁾は、集落を立地条件から山方・野方・田方・浜方に分類し、山方・野方の2集落の事例から民俗事象の整理を行い空間構成に論及した。この研究では、集落内の地名や地形方名を網羅的に収集する作業が行なわれなかったため、微細地形と対応づけられた空間認識の分析が不十分である。

フィジカルプランの分野では、建築出身者の研究があげられる。いずれも微細地名・地形方名を分析しており、平井⁵⁾は沖縄本島北部の山原型の集落を、重村⁷⁾は四国の山村と奥能登の漁村を、後藤⁹⁾は多摩市の農村を報告している。いずれの研究でも、地名・地形方名と空間との対応関係が不明瞭である。

この種の研究では、日本の様々な地形条件における多くの事例を蓄積することによって、空間認識の普遍性と多様性を明確にする必要がある。このための第一歩として、本研究では、日本の一般的な集落立地の一つである台地崖下に位置する久末集落を事例としてとりあげた。そして、集落の地形方名・微細地名を網羅的に収集・分析し、村人の民俗分類にもとづく空間の構造・地形形態の認識など地相体験の内容を明らかにするとともに、従来の実証研究では不十分であった集落空間に関する村人

* 茨城大学工学部 ** 東京工業大学工学部

の社会的・コスモロジー的・景観的な価値の諸相について論及することを目的とする。

2. 調査概要

(1) 調査対象集落

久末は、面積約130haで、多摩丘陵の東部に位置している。図1のように、集落の南部に下末吉面の洪積台地、北部に有馬川・矢上川の作る沖積平野があり、4つの舌状台地が南から北へ張り出していて、その間にヤトと呼ばれる開析谷が発達している。かつては純農村であったが、昭和32年に市営久末A住宅が建設されて以後、宅地化が進行した。¹⁾ 本稿では、市街化が進む以前、高度経済成長期に伝統的な生活様式が大幅に変容する以前の明治初期から昭和30年頃までの時期を対象として、久末の民俗空間構成を調査した。

明治2年の久末は、戸数56(住職の住む寺は除く)・人口277¹⁾であり、以後昭和20年代までに戸数は60戸と微増した。昭和14年の地形図を、図1に示す。家屋はすべて、台地崖下に立地している。家屋はかなり分散しており、明治7年の段階では28戸の敷地が互いに隣接していた。このうち、久末谷の9戸の集合を除くと、いずれも4戸以下の集合であった。他の28戸は孤立して立地しており、小村に近い散村¹⁾の形態をとっている。

(2) 調査方法

- ① 「久末村地引絵図(明治7年)」, 「村内地理全誌(明治9年)」より、明治初期における公称地名(表1)・土地利用・地物の位置を判読した。
- ② 「1/10000の地形図(昭和14年)」, 「空中写真(昭和23年)」より、昭和期における地形・土地利用・地物の位置を判読した。
- ③ 久末の3名の古老と面接し、②の資料・「住宅地図」, 「1/2500の基本図(昭和56年)」を提示

図1 久末の地形図(昭和14年)

表1 久末の微細地名

調査の分類		公称地名	通称地名
地形	谷(†)	後谷・宮谷・寺谷 畝谷・谷中・久末谷 小貝谷・饅頭谷 大谷・城法谷 城法谷上	表谷・芋ノ谷・下ノ谷 長谷
		久保	別当久保
		山	根久留美山・御嘉山
		崎	西ヶ崎・山崎
		原	伊勢原
		野	遠野
	水系	堀	桜堀・花立堀
		川	矢上川・有馬川
		堀	中堀(2つある)・谷堀
		堀	堀下
道路	道	清水	チョウチョウ水
		道	道下・横大道
		坂	坂道
		坂	馬坂・長坂・谷坂 暗闇坂・大坂・後坂
農地	田	橋	五反田橋・高ノ果橋
		田	一ショウ田・五反田
農地	耕地	後耕地・表耕地	
		耕地	
住居		陣屋跡	中屋敷・陣屋
信仰	十二天丸		下ノ宮・杉山権 天王様・第六天 十三菩薩・観音堂
その他			大上・足洗場・高札場 馬捨場・猫捨場
不明		明石徳・イノ木	

川・橋 以外の公称地名は、すべて小字名である。

し、場所と対応づけながら、微細地名・地形方名・土地にまつわる伝承・集落内小集団の呼称・土地に関する体験などの聴取を行った。表1の通称地名は、このとき集収した。

- ④ 現地の踏査を行い、地形の観察と、現存する地物、および地物の跡を確認した。
- ⑤ 「新編武蔵風土記稿(天保元年)」に記載された地名と③の地名を、比較考察した。

3. 空間の構造と形態の認識

(1) 地形単位の認識

久末ではハラ・ヤマ・ヤト・コウチという4つの方名が、地形型に使われていることが聴取から明らかになった。久末の地形断面は図2のように構成されており、地形方名は、表2のように土地利用とも密接に対応している。ハラは台地の畑を、ヤマは斜面林を、コウチは低地

図2 地形断面の模式図

表 2 地形型

地形方名	地形	土地利用	微細地名の例	備考
ハラ	台地面	畑地	伊勢原	
ヤマ	台地崖	村地	表山・丸山 根久留美山など	雑木林のヤマを ベーラ山と呼ぶ
ヤト	谷低	居住地 水田・畑地	表谷・後谷 大谷など	クボはヤトの 変種
コウチ	低地	水田	表耕地・後耕地	

の水田を示している。利用価値の低い雑木林はベーラヤマ、地力の低い耕作地はシケツパと呼ばれていた。

明治初期に採用された小字名に、表山・後谷・表耕地・後耕地がある。久末は、表谷と後谷（略して表と後）の2地区に分かれており、この地区名と地形方名とが組み合わされて小字が命名されたものと考えられる。

(2) 微地形の形状認識

平坦な地形面を持つハラ・コウチを除き、地形に起伏のあるヤマ・ヤトは多彩な姿・形をもっている。命名された当初の位置が比定できるヤマ・ヤトを図3に示し、

図 3 微地形の形状分布

表 3 微地形の形状分類

方名	平面形状	地名	規模 (m)	備考
ヤト	メ-ハ-状	大谷	80X600	
	帯状	長谷	40X500	
		寺谷+宮谷	40X300	
	U字状	籠場谷	40X150	大谷の支谷・馬を飼う
		城法谷	80X350	
		芋ノ谷	30X150	小型
	V字状	久末谷	120X200	住居が多い
		小貝谷	140X150	住居が多い
		後谷(狭義)	60X150	
クボ	半円状	梅ヶ久保	50X80	長谷の支谷
ヤマ	丸い尾根	根久留美山	100X140	堀にくるまれる
		御墓山	100X100	佐橋氏の墓がある
	丸い丘	丸山	70X40	塚がある
サキ	尖った尾根	西ヶ崎	50X100	子母口村の尾根
		山崎	80X120	野川村の尾根

*規模は傾斜変換線の幅X奥行を測った。

図 4 ヤト・クボの奥行体験

その平面形状・規模を表3にまとめた。地形方名の分類から考えると、サキはヤマの、クボはヤトの変種と言える。

ヤマはいずれも下から見ると丸い形をしている。なかでも、根久留美山は久末の北端に位置し、北麓を堀が取り囲んでいて目立つヤマであった。御墓山・丸山は、聴取によると命名の由来が明確なヤマであった。他にもヤマとみなされてふさわしい丸尾根が観察できたが、由来・伝承に欠けるために村人に認識されなかったものと予想できる。サキはヤマに比べ、やや尖っていると観察できた。

聴取によると、ヤトとは三方をヤマに囲まれた小谷を指している。ヤトの横断面形状は深皿状であり、平面形状は図3、表3のようにアメーバー状・帯状・U字状・V字状に大別できる。久末最大のヤトは、アメーバー状のオオヤトである。帯状のナガヤト「寺谷+宮谷」は、矩形の水田が長辺を接して細長く連なっている。U字状の典型例は、籠場谷である。古江¹⁴⁾によれば、籠場とは馬を囲い籠の中世の牧場のことで、谷の入口に柵を作り、急傾斜のヤマが登れない馬を放し飼いにした場所である。圍繞地形の利用に由来する適切な地名と言える。V字状のヤトにはいずれも家屋が多い。谷口から谷頭の方角を見れば図4のように先が絞られるので、半円状のクボよりも見かけのうえでは奥行を感じる。

聴取によれば、クボはヤトと明確に区別して認識されていた。クボは、奥行に比べて幅があり、円形に近い形をしているとともに、台地上から見下しやすい地形であると言われている。伊勢原の端から梅ヶ久保を、周囲の台地から久末に南接する高田集落の久保を見下すことができる。

(3) 位置関係の認識

上・下・表・後という位置関係を表すことばから地名を分析し、その結果を図5に示した。後谷は1つの小字名であるとともに、久末西部の9小字を総称する通称地名でもあり、通常は後者の意味で用いられている。対する表谷は、東部の14の小字から構成されており、両者の中間に伊勢原・楸谷の小字がある。伊勢原には、神社合祀後に唯一境内が残された伊勢宮が鎮座している。伊勢原の尾根で表谷と後谷が分けられると言われており、伊勢原は集落の対象軸と考えられる。

表谷には、久末発祥のヤトと伝えられている久末^{ヤト}谷が

図5 位置関係の模式図

あり、集落の中心としてインフォーマントに認識されていた。表谷の東部に位置する下ノ谷は、中心の久末谷から周縁であるとともに、矢上川の下流でもあったために命名されたものと考えられる。

後谷は、新編武蔵風土記稿に「山の後ろなる故にかく呼べり」とあり、久末谷から見た時の山の背後の地区であることがわかる。後谷は、上と下の組に分けられ、上は表谷側、下は西の村境側を指し示し、有馬川の流れとは逆になっている。中心に近い方を上、遠い方を下にしたと考えられる。

桜道と呼ばれる道路の北側の低地には、道下という小字がある。城法谷の南の台地は、城法谷上と呼ばれている。いずれも土地の高低を基準に上下が命名されたものと考えられる。

矢上川の堰から分流した堀沿いの低地は、堰下と呼ばれている。矢上川の下流であることから命名されたものと考えられる。

伊勢原を対象軸とした表後、久末谷を中心とした上下、地形面の上下、河流の上下という4つの位置関係の基準が錯綜されながら、適宜使い分けられていたことが明らかになった。

(4) 方位・方向の認識

一般に、〇〇風・富士向いなどの民俗方位・方向が伝承されている集落は多いが、久末では天気俚語の一例だけが聴取から確認できた。これは、春海秋山と呼ばれる観天望気で、春は早朝東の東京湾の方向が晴れていればその日は好天、秋は逆に西の丹沢山地の方向が晴れていれば好天であるとされていた。海と山が、方向性を認識する対象になっていたことがわかる。

4. 空間の価値認識

(1) 社会的価値の認識

ヤトという呼称は、谷地形を表すとともに集落内の地

表4 社会集団としてのヤト

ヤトの呼称	小字	家屋	寺院	神社	堂	意味の濃密な場
後谷	下	降屋添 3				中屋敷、降屋
	後谷	3	1	1		
	寺谷	1				焼場
	宮谷					
	上	後新地 1				
	横大道 1					
表谷	梅ヶ久保 6					高札場
	伊勢原			1		伊勢宮
	久末谷	9		1		足洗場、大上
	小貝谷	5	1	1	1	
	谷中	1				
	大谷	達野 5				
下ノ谷	籠場谷 6			1		馬捨場
	大谷 4					
	イノ本 3					
	芋ノ谷 十二天丸 4			2		
	下ノ谷	城法谷 4		2		下ノ宮、猫捨場
						鹿楽橋
計		56	2	9	1	11

縁的社会集団を指す方名でもある。このことは、谷の閉域性が社会集団の凝集性と分かちがたく結びつけられて村人に認識されていたからであろう。聴取によって収集できたヤトの名称を、小字名・地物等と対応づけると、表4のようになった。後谷・大谷はヤト名であるとともに小字名でもあるが、実際にはほとんどヤト名として人々に使用されている。また、達野等の小字名は、屋号に転化して使われている場合があった。一方、梅ヶ久保・籠場谷等は、小字名として比較的頻繁に用いられていた。明治初期の地租改正の時期に公称地名として採用された特定の区画を示す小字名は、後に一部で、谷地形名・社会集団名・屋号と混同されてきたものと考えられる。土地が、集落内小集団・家と錯綜して村人に認識されてきたのであろう。

久末において、お祭講中・葬式講中・塞ノ神の祭といった講集団は、単数または複数のヤトで構成されている。たとえば、後谷では、お祭講中を小貝谷と、葬式講中を久末谷と共同で行い、塞ノ神の祭は単独で行っている。このように、講の種類によって集団を構成するヤトの組合せが異なる。つまり、ヤトとは、表4のように樹木状の階層秩序を持つ集落内小集団であるとともに、セミラティス状に組合わさって行事を行う集団なのである。

前述した上下表後という位置関係を表すことばは、同時に社会的優劣を表すことばでもある。聴取によると、下ノ谷は、分家筋が多く、経済力が低く、社会的地位が低いヤトと村人にみなされていた。一方、久末谷は、中世に開かれた久末草分の地であり、本家筋が多く、経済力があり、社会的地位が高いとみなされていた。

このように、地名によって指し示された空間は、社会構造を反映した価値と不可分に結びついて村人に認識されていた。

(2) コスモロジカルな価値の認識

中村¹³は「都市の深層を構成する諸要素として重要な

のは、東西南北、上下(天地)などの有意味的な方向性であり、聖なる場所・俗なる場所・穢れた場所の配置であり、坂・橋・川・境界などのもつ記号論的な意味である。」(傍点筆者)としている。都市を集落と置き換えれば、本稿の主題そのものになる。中村の言う聖・俗・穢とは、バーガーの提唱するコスモス・ノモス・カオスに依拠しており、民俗学というハレ・ケ・ケガレ¹⁴とも通じる三元論的概念である。これらの三元論は、論者によって概念規定に若干の差位が認められるため、筆者なりにこれを解釈して表5にまとめた。

ハレとは、神ごとに係る清浄でめでたい事柄である。聴取によると久末にとって秋祭は最大のハレの行事であり、祭の行われる伊勢宮がハレの場所と解釈できる。

ケは日常の常態を表す事柄である。聴取によると、久末の草分の場所、近世に久末を支配した佐橋氏の屋敷跡、近世に御軸書を掲示した高札場が居住と関連の深い日常的な場所の中心であった。いずれもヤトにあり、ケの場所だと考えられる。

ケガレは、不浄で不幸を呼ぶ忌ましい事柄であり、死

表5 ハレ・ケ・ケガレの特性

概念	ハレ 聖 コスモス	ケ 俗 ノモス	ケガレ 穢 カオス
特性	秩序 非日常性 清浄 幸 吉	秩序 日常性	混沌 非日常性 不浄 不幸 不吉
位置	中央	中央	周縁
場所	ハラ	ヤト	村境の近く
視野	鳥瞰的	虫瞰的	
例	伊勢宮 (伊勢社)	陣屋(佐橋氏) 中屋敷(佐橋氏) 足洗場(草分) 大上(草分) 高札場	馬捨場 猫捨場(第六天社) 焼場(伝染病の死者を焼く) 下ノ宮(杉山社) 鷹巣橋(虫送りの送り出し地点)

図6 濃密な意味を帯びた場所の分布

・危険と結びついている。聴取によると捨場・焼場・害虫を送り出す地点が、ケガレた場所とされていた。馬捨場は、村境近くの暗闇坂(別名座頭転ばし)の傍にあり、名称からも物騒なイメージを与える。長坂の坂下に位置する鷹ノ巣橋は虫を送り出す村境でもあり、中村の言う4条件が重なった極めて周縁的な場所である。図6からもわかるように、ケガレの場所はいずれも集落の周縁部に位置している。伊勢宮がハレの場、第六天社・下の宮がケガレの場と、同じ神社でも性格を異にしている。「忌」と「斎」が同じ概念から分化したことばであることからわかるように、神社におけるハレとケガレは転換されやすいのである。ただ、神社とは、ハレとケガレが転換する両義的な場所であっても、曖昧な場所ではない。

以上より、久末では、ハレ・ケ・ケガレに該当する濃密な意味を帯びた場所が村人に認識されていたことがわかる。つまり、これらの場所の配置が、集落空間にコスモロジカルな価値を与えていたのである。

(3) 景観的価値の認識

伊勢原は、久末の中央に位置する舌状台地であり、良好な眺望地点である。聴取によると戦前は、東に、11km離れて池上本門寺の屏風立つ森が、北に砂利船が往き來する多摩川が見渡せ、西に丹沢山地と富士山が遠望できた。また、伊勢宮の境内と、北に10km離れた駒沢練兵場との間で、手旗信号を交換していた。また、久末に東接する蟹ヶ谷集落の小字四方ノ嶺は、そこでの聴取から舌状台地の良好な眺望にちなんだ地名であることがわかった。

聴取によると、伊勢宮には、背の高い松林があり、久末のランドマークとして村外から観られていた。

また、伊勢宮では10月11日に秋祭りが開かれ、近隣のムラからも多くの人々が集った。

このように、伊勢宮は、集まって他村を眺めるといふ主要な視点場であるとともに、他村から観られるランドマークでもあり、豊かな景観体験を得る空間として村人に認識されていたのである。

5. まとめ

方名・地名の分析、現地の観察、聴取結果の解釈等から明らかになった久末の村人による伝統的な空間認識は、以下のとおりであった。

- ① 地形は、ハラ、ヤマ、ヤト、コウチと呼ばれる4タイプに分類されて村人に認識されていた。
- ② 特徴的な形状を持つ地形・命名の由来が伝承されている地形が、村人に強く認識されていた。
- ③ 神社の鎮座する尾根の表後・集落発祥の地を中心とする上下・地形面の上下・河流の上下という4つの基準が錯綜しながらも、位置関係の認識が構造化

されていた。

- ④ 集落外への方向性が、海と山を基準とする観天望気との関連で村人に認識されていた。
- ⑤ 地名によって指し示された空間は、社会集団の単位・組合せ・優劣といった社会的な意味・価値と結びつけられて村人に認識されていた。
- ⑥ ハレ・ケ・ケガレに該当する濃密な意味を帯びた場所が集落に布置されており、村人は空間にコスモロジカルな価値を認識していた。
- ⑦ 景観体験の特異な場所（眺望点）が存在し、それが村人に強く認識されていた。

以上の結果から、伝統社会の住民は、用途と結びついた地形単位、集落内での位置関係、集落外への方向性という自己を中心とする身体感覚の延長線で空間構造を捉え、これに加えて印象深い地形の姿・形を肌理細かく認識していたことがわかった。さらに、このような空間構造の認識のうえに、村人によって社会的・コスモロジック・景観的な価値が重ねられていたことが明らかになった。今後、立地条件の異なる集落において、この種の調査を行い、より一般化した空間構成モデルを明らかにするとともに、多様な地相体験の事例を報告していきたい。

調査を進めるにあたり、久末の森勝治氏・池田正順氏・森増五郎市・石井章司氏、日本地名研究所・川崎地名研究会の方々にお世話になりました。また、建設省土木研究所の篠原修氏、茨城大学の山形耕一教授・小柳武和助教授に御助言・御支援をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

Summary : The aim of this paper is to report on traditional spatial cognition of topographical features, by case study of Hisasue settlement on east side of Tama hills, using a method of folk-taxonomy by place name and vernacular name.

The results are summarized as follows:

- (1) Landforms are classified into 4 landform types by means of vernacular name.
- (2) Relief features which is characteristic, and which origin of naming has been held are recognized.
- (3) Spatial relationships are recognized by combination of 4 criteria (front-back, upper side-lower side, center-mergin, upper stream-lower stream).
- (4) Orientation is recognized by the direction of the sign in weather in relation with mountains and the sea.
- (5) Topographical features are socially valued by social groups of unit, combination, and superiority or inferiority.
- (6) Being of core places which mean cosmos, nomos, and chaos give a settlement cosmological value.
- (7) There is abundant experience of landscape at a view point which is the core place of cosmos.

補註および文献

- 1) 柳田国男(1935) : 地名の研究 : (角川文庫版70頁より引用した)。
- 2) vernacular name の訳で、民俗呼称をさす。
- 3) 浅野久枝(1984) : 東京都三宅島における地形を主とした民俗分類体系 : 地理学評論, 57(8), 519-536.
- 4) 松崎憲三(1983) : 村落の空間論的把握に関する事例研究 : 国立歴史民俗博物館研究報告 2.
- 5) 松崎憲三(1984) : 景観の民俗学 : 国立歴史民俗博物館研究報告 3.
- 6) 平井秀一他(1975) : 方言地名の研究その1~2 : 日本建築学会大会学術講演梗概集, 959-962.
- 7) 重村力他(1983) : ある集落の研究# 6, 7 : 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1939-1942.
- 8) 重村力他(1984) : ある集落の研究# 14-16 : 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1819-1824.
- 9) 後藤春彦他(1980) : 集落景観の意味論的分析と再構成 : 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1307-1308.
- 10) 竹内理三編(1984) : 日本地名大辞典14神奈川県 : 角川書店, 741.
- 11) 地理学では、一戸一戸分散している集落を散村、数戸程度までに小規模に集合している集落を小村と定義している。
- 12) 古江亮二(1981) : 歴史解明資料としての地名「地名と風土」 : 小学館, 92-98.
- 13) 中村雄二郎(1984) : 術語集 : 岩波書店, 116-120, 136-140.
- 14) 波平恵美子(1984) : ケガレの構造 : 青土社, 21-34, 195-214.